

研究テーマ：小学校において英語学習経験を有する生徒への指導

所属 田野町立田野中学校
氏名 長谷川 利文
R G J H 3

1 研究の背景

田野町では、田野幼稚園、田野小学校および田野中学校が平成14年度からの3年間、文部科学省の研究開発学校として「国際社会に生きる力をはぐくむため、幼稚園（年長）、小学校、中学校の10年間を見通した英語教育の課程・指導方法の研究開発」を研究開発課題に掲げている。小学校では、まだ教育課程に位置づけられていない「英語科」を設置し、幼稚園、小学校、中学校の10年間を見通した教科の内容や方法を研究している。

本リサーチの対象である1年生は、上記の研究開発のなか、小学校において2年間「教科としての英語」、すなわち「英語科」としての英語の学習を経験している。そうした彼らは、中学校に入学しても全体として明るく意欲的に学習に取り組み、また英語に対する興味・関心も高い。

研究開発の下、上記のような背景を有する彼らに対する指導のあり方をリサーチしたい。

2 リサーチ・クエスチョン

「小学校の指導方法の導入と中学校の新しい指導方法」

3 予備調査

- ① 小学校での英語学習に対して・・・「小学校で英語を勉強したことがよかったですか。」の設問に対して、およそ67%が「よかったです」と回答し、その理由として「自信がついた」の割合が最も高く、ついで「小学校で習ったことを覚えていて、役に立った」と「コミュニケーションの能力が高まった」が高かった。（平成16年7月実施）
- ② 中学校の英語学習に対して・・・「4技能の活動のなかでどの活動が楽しいですか。」の設問に対して、「聞くこと」「書くこと」の割合が高く、「授業のなかで何が楽しいですか。」に対しては、「みんなと活動すること」と回答した生徒が多かった。また、「聞く・話す・読む・書くなど、ぜんぶがんばりたいです。自分でもがんばるけど、友だちと一緒にがんばったら、もっともっと英語が覚えられると思います。先生の話をよく聞いて、友だちといっばい活動したいです。」と、象徴的な思いを記してくれた生徒がいた。（平成16年5月実施）

4 仮説の設定

- ① 『聞くこと』から『話すこと』へ、そして『読むこと』『書くこと』へについて田野小学校および田野中学校が一貫した方法で指導すれば、実践的コミュニケーション能力の基礎が養えるであろう。
- ② 様々な活動形態および指導方法の工夫を行えば、英語に対する生徒の興味・関心は高まるであろう。

5 計画の実践

- ① 小学校の英語担当者との会議や小学校の授業参観を通して、小学校の指導方法を認識でき、中学校においても、『聞くこと』から『話すこと』へ、そして『読むこと』『書くこと』へという指導方法の一貫性を踏まえた授業実践ができた。
- ② 指導目標に応じて様々な活動形態（ペア、3人グループ、大グループなどでのシャドーイングやスキット）の導入を試みた。
※ 指導目標を実現するために、日常の授業において下記の実践を行った。
 - ・ 実際に英語を用いて、お互いの気持ちや考えなどを伝達するコミュニケーションを図る活動を多く取り入れた。

- ・ コミュニケーション活動においては、具体的な使用場面や状況（電話、道案内、買い物、旅行など）に合致した表現を自ら選択して言語活動ができるようにした。
- ・ 幼少の段階から英語活動・英語教育を行っているとはいえ、英語活動に対する関心、態度や積極的にコミュニケーション活動に参加しようとする学習意欲の面において個人差がある。したがってT2やALTと協力し合いながら一人一人の生徒の実態を捉えたうえで、個に応じた指導を行い、さらにすべての生徒にとって楽しいコミュニケーション活動となるよう心がけた。

6 実践の結果

- ① ○ 小学校の英語担当者等との会議を設けたり、小学5、6年生の授業に参加すること等により、小学校での指導内容や指導方法を認識できたばかりでなく、小学生の実態を把握することができた。また、小学校で既習の言語材料を中学校で発展的に扱う（語・句から文・談話へ）など内容面でも多くを改善できた。
- ② ア コミュニケーション活動においては、小学校で行われてきた体験的学習の成果をよりいかにするために、具体的な場面や状況を設定するとともに、自己表現活動を重視した。とりわけ、「書くこと」に関する自己表現活動に対しては意欲的であった。
イ 「聞くこと」から「話すこと」へという小学校と指導方法〔過程〕を同一にし、さらに徐々に「読むこと」および「書くこと」につなげる活動へという方法で指導した。このことにより、小学校と中学校の指導方法の相違点が無くなりつつあるし、生徒たちの指導方法の相違による戸惑いも最小限にとどめることができた。また、フラッシュ・カードやピクチャー・カード、CD、具体物は言うまでもなく、パソコン等の視聴覚機器等も効果的に利用した。
- ③ ○ ペア、3人組、大グループ等、指導目的等に応じて、様々な活動形態を導入した。生徒たちは「何のために活動するのか。なぜこの形態なのか。」を少しずつ認識できるようになり、「やらされる活動」ではなく、その意義を理解した上で「自主的な活動」へと意識面でも変容が見られ始めた。

7 結果の検証

小学校段階から「話すこと」に対する自信を抱いていた生徒たちは、中学校での活動においても十分その力が生かされていることに気づき、「話すこと」への意識が高まったばかりでなく、「聞くこと」および「書くこと」への意欲が少しずつではあるが高まってきた。とくに、「書くこと」における自己表現活動への意欲は高い。

自己表現活動は実践的コミュニケーション能力の育成の過程において、とても重要なものである。そういった意味で、田野小学校と田野中学校が『聞くこと』から『話すこと』へ、そして『読むこと』『書くこと』へという指導方法〔過程〕を同一に行っていることは、実践的コミュニケーション能力を養っていくという点で重要であるということ、あらためて認識することができた。

また、指導方法に様々なバリエーションを持たせることによって、生徒たちの英語の授業に対する「マンネリ化」を抑止することができるということだけでなく、英語の授業・英語そのものに対する興味・関心が高まっていくことも確認することができた。

8 成果と今後の課題

小学校段階ではゲームなどを多用し、「聞くこと」および「話すこと」を中心とした学習を行っている。そうした指導方法を可能な限り中学校に導入していくことによって、小学校において英語学習経験を有する生徒への指導がスムーズにできるであろうと考えた。

小学校で行われている体験的学習をより活かすために、具体的な場面や状況を設定したコミュニケーション活動を多く取り入れたばかりでなく、『聞くこと』から『話すこと』へ、そして『読むこと』『書くこと』へという指導方法を導入したことによって、生徒たちがスムーズに中学校の英語学習に移行することができ、また現在においても「話すこと」というまでもなく、「書くこと」に対しても意欲的に取り組んでいる。とりわけそれらのことは自己表現活動において顕著に見られる。

ところで、小学校の指導方法を可能な限り中学校に導入するとしても、小学生と中学生との発達段階に違いがある。今後、この点を十分考慮して、小学校の指導方法を導入しながら、なおかつ中学生の発達段階に応じた指導方法へとアレンジし続けていくことが重要であると考え。今後は、今回のリサーチを土台にしてそのような点に焦点をあて、本研究テーマに関する研究を深めていきたい。